圖版解說

一、二　普賢菩薩像

東京　大倉集古館藏

木造着色坐像　全高一・三九米　菩薩　高五五糎　象　高五九糎　長一・〇九米　框座　幅四五糎　長九三糎

等身には及ばぬ小像、一絲を亂さぬ端嚴な合掌の姿勢で、蓮華座の上に趺坐し、溫柔な靈象の背に、浮び出でたる如く、靜かに顯現する。象の長大なのに比して菩薩の聊か物足りなく見えるのは、蓮華座の上面に取り着けられてあつた光背を失つてゐるからで、其の他にも部分的には、象の牙、左膝より垂れた裙衣の蓮瓣に懸る部分、天衣の端等を缺損し、天衣の右腕に懸る部分に後補あり、又寶冠、瓔珞、或は象の頭上、鼻端、羈革等に飾られてゐた經典の示す持物、莊嚴具の類、及び恐らく象の四足を各々承けてゐた筈の蓮華座など、總てを失つて淋しくなつてはゐるが、彫刻本體としては概ね良く保存され、彩色も部分的に剝落はあつても當初のものを遺して殆ど補修を見ず、框座まで揃つて原狀を彷彿させてゐるのは貴い。

纖巧と云つてよい程神經の行き屆いた作であつて、しかも遲疑澁滯の痕を見せず、釣合の困難な此の騎象像を、些かの隙も不安もなく、菩薩と象とを唯一つに纏め上げたのは、名匠の技と稱すべきであらう。象が其の胴に比して足の著しく短く作られてゐることも、蓮華座や敷茄子の形、比例の行き屆いた用意と相俟つて、此の安定を成してゐると思はれる。

菩薩は髻低く、豐頰圓滿の相を示し、姿態の釣合よく、總て柔和な無理のない曲線に包まれ、刀法亦溫雅に淺く、安らかな心持を湛へてゐる。裳は襞をなして蓮華座の上に擴がり、其の端が左右に垂れて、蓮瓣の一葉毎に懸る表現は心憎いばかりである。臺座は、反綏く、淺く開いた五遍葺の蓮華座に、花挾、敷茄子を各別に作り、鞍の上面に作り出した反り花の上に重ね、之等の中心に貫孔を穿つて心木を通し、象の背に取り着けてある。鞍は胴と別に作つて重ねたものであり、象身に取着ける羈革の細部などにも寫實的な技巧が見える。象はもとより類型化され、一種靈獸としての樣式の完成を見せてゐるが、觸れば柔く溫いかと思はれる程、骨格や肉のたるみの自然を表はさうとしてゐる。

總て巧みな寄木法により、菩薩は檜、象は杉材を用ひて、之に麻布を貼り、胡粉で下地を施して、全體に厚く彩色する。現在可なり剝落もあり、淡褐色に燻染してゐるが、其の古色に包まれた底から輝く、五彩と金色との仄かな耀きは、仔細に見て愈々其精緻な美しさに歎賞を禁じ得ない。菩薩の肉身と象の身體とはもと白色に塗られ、菩薩の刻出の眼、眉、髭等に墨描きが遺り、唇には朱色が見える。肩衣は綠青地に赤緣、裙衣亦綠青に彩られ、これ等に總て細密優美な截金文が施されてゐる。その截金裝飾の變化に富み、自由な技巧の妙を極めてゐることは、此の像の美しさを倍加させてゐる所で、近づけば鏤めた金象嵌とも見え、離れては底光りする高貴な綾錦とも見える。其の文樣は部分によつて、菊花唐草、七寶、卍繋ぎ、格子、忍冬立涌等を配し藤原期に於ても代表的な優秀さを見せてゐる。[註] 臺座の各部にも截金を施し、蓮瓣は綠青地に細き金の筋描きあり、奥の殆ど現れぬ部分に繧繝彩色の寶相華文を描く。鞍亦彩色文に彩られ、象の眼は金色、羈革は朱地に截金を置き、框座は殆ど剝落してゐるがやはり全面が花文に彩られてゐたことが分る。

此の他尙經說に從ふ一切の莊嚴具足した當初の、此世ならぬ美しさは想像に

餘りがある。極樂の光輝と華麗さとを有つて、しかも人間に遠くない此の像は、威力を見せるではなく、怪異な神祕に人を醉はせるでもない。何處迄も生身の菩薩として、殊に、持物を持つより、印を結ぶより、合掌の姿は人の心に強くシンパセテイツクに働きかけ、人の心を溫める。

普賢菩薩の出現と、其の色身を觀る願望の信仰は、法華經の尊信篤く、法華三昧の行法が盛に行はれた平安朝初期から藤原時代に廣く行はれた。多武峰略記には、覺睿禪師が天喜六年三十四歳で出家し、常に法華經を讀み粗妙義を解した頃、或時普賢來つて頂上を摩した云々、の由を傳へ、播州書寫山の性空上人が、遊女の姿に六牙の白象に乘る普賢菩薩を見て信仰恭敬して感涙を拭つたと云ふ物語は、古事談等に遺されて有名である。

法華經普賢菩薩勸發品に「是人若行若立讀誦此經、我爾時乘六牙白象王、與大菩薩衆俱詣其所、而自現身、供養守護安慰其心」とあるに基き、普賢菩薩は法華三昧の道場に其の身を現はし、行者を守護して其の願海に入らしむるものとされる。其の出現の形像等に就ては觀普賢經の所說が信仰され、此の信仰に基いて普賢菩薩を本尊とする法華三昧の修法が至る所に行はれたもので、其の爲に一宇の小堂を建て、之を法華三昧堂、或は普賢院などと呼び、普賢菩薩の像を安置したことは諸書に多く見えてゐる。三塔諸寺緣起に

葺二檜皮一方五間堂一宇。安二置普賢白象像一軀一。（中略）右。九條右大臣師輔草創也。天曆八年月日。（中略）忽發二願念一草二創法華三昧堂一

とあるなどその例で、榮華物語、玉臺に

「にしの御門の南のかたに、檜皮ぶきのさゝやかなる御堂あり。かれは三昧堂ぞかし。いざまいらんとてゆけば、みあかしの光ほのかにみえて、轉法輪の座に僧ゐたり。普賢いとさゝやかにて象に乘てたゝせ給へるも、いかめしうおはします。」

と見えるなど、其の間の消息をよく傳へてゐる。

當時三昧修行の流行と共に、其の本尊たる普賢菩薩騎象像が數多く作られたことは自然であつた。恨むらくはそれらの作品亡びて今日に多く傳はらず、國寶彫刻中大倉集古館の此の像を別にしては、岩船寺、（西大寺大鏡第十八册參照）（西大寺大鏡第十三册參照）に各一軀を遺す位である。

尤も普賢菩薩像は上述の如く法華三昧會の本尊として作られたとは限らず、文殊菩薩と對して釋迦の兩脇侍をなし、或は密敎に入つては種々な形像が與へられてそれ等の像も造顯されたが、恐らく本像は以上の如き法華三昧會の本尊として、その行者の讚嘆信仰の對象となつたものと想像され、斯く考へてこそ本像の尊容がいかにも相應しく思はれる。その傳來等に關して何等徵すべきものを詳にしないが、技巧圓熟せる藤原末期、中央に於て一流の作者の手になり、然るべき結構の中に莊嚴されたものであらう。當代繪畫の遺品中類似の形像を描いた作は幾つかあり、中でも東京帝室博物館所藏の一幅は代表的名品とされてゐるが、稀なる彫刻中それとも並ぶべきものは本像を以て唯一とし、藤原彫刻中でも名作の一として尊重される。

因に本像は昭和六年一月國寶に指定された。（靑山）

註　本像藏金文に關しては漆と工藝第三六三號に野間淸六氏が詳細に圖解して居られる。

三、四　默菴筆四睡圖　東京　侯爵　前田利爲氏藏

掛幅　紙本墨畫　竪七〇・八糎　橫三六・〇糎

便々たる垂腹、滿月の面、一見布袋和尙と見紛ふ如き豐干が、寒拾を兩脇侍とし、虎に凭れて、山中懸崖の下、酣睡を貪る圖で、その背景は針葉樹と濶葉樹と多少趣は異なるものの、寒山詩に所謂泣露千般草、吟風一樣松の句を想起せしむるに十分である。祥符紹密の加へた贊語にいふ。（その印記は「白雲深處」）

老豐干抱レ虎睡、拾得
寒山打作二一處一、做レ場大
夢當風流、依々老樹
寒巖底

四睡圖の眞諦は何處に在るか、若し視聽を閉ぢて情慾を絕し、無爲無事、虎な